

にも多くの取り組みが存在するだろう。そうした他の最適化の可能性は本特集で寄稿された複数の記事から学ぶことができる。これらの多様な視点から本学における新たな学びのかたちを構築することは可能であろう。しかしながら、最適化のプロセスは単年度で完了するものではないと考える。教育とは、視点を変えれば「実験」的な側面を併せ持つ。理想的な学びのかたちに至るまでには、新たな試みを取り入れつつ試行錯誤を繰り返す必要がある。つまり、最適化とは失敗を前提とした実験的な教育改善だと捉えることができる。失敗には時間的にも費用的にもコストを要する。しかしながら長期的な側面から鑑みるに、表層的に見栄えのする24種類のジャムを増やし続ける改悪ではなく、失敗を繰り返しながらも選ばれた6種類のジャムを作り出す教育改革が新たな学びに必要な「最適化」であると献言したい。

引用文献

- 冬野美晴 (2018). 遠隔教育におけるテレプレゼンスツールの比較実験－英語授業でのテレプレゼンスロボット使用検証－, 言語科学, 53, p.47-53.
- Iyengar, S., & Lepper, M. R. (2000). When choice is demotivating: Can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 995-1006.
- J-Cast ニュース (2019). J-Cast ニュース, 京都大学の「ニコニコ動画」風講義に反響 ツイッターで4万以上の「いいね」を集める <https://news.nifty.com/article/- domestic/society/12144-246138/> (2019年4月14日).
- 岡村栄里奈・田中文英 (2016). 双方向テレプレゼンスロボットを用いた高齢者による子どもへの遠隔授業の実現に向けた予備実験の報告, The 30th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence.

学生の学びにあわせた教員の立ち位置へ

准教授 大 川 亘

早いもので気づけば大学に勤務して四半世紀になるが、これまでの経験からの感じたことなどを書きたいと思う。

1. 尚綱着任前

私自身が受けた大学教育は、教養教育から専門教育、そして研究室での卒業研究といった流れであった。教養科目は履修選択の自由度が高かったが、学科の専門科目は、選択であっても履修要件を満たすためにはほとんどを履修せねばならず、履修しないものを選択するというものだった。また必修の実験・実習は通年科目として毎日半日行われていた。各研究室のスタッフが分担し、研究に必要なスキル・経験を学生に身につけさせるものだった。多くのテーマ課題を数週～1ヶ月連続で取り組んだ。結果として、研究室配属を決定する時点では、誰もがほぼ同じ専門教育を受けていることになった。研究室に入ってから、研究分野に特化した教育をグループあるいはマンツーマンで受けるのである。別の見方をすると、研究教育を行う前に共通して必要な専門基礎を身につけさせる。その進め方は教員主体であり、一方通行的あるいはサービス権移動のない球技のようなやりとりだった。研究室配属となっはじめて研究室教員や先輩院生との能動的なコミュニケーションのやりとりを行うようになった。具体的に言う

と、実験・研究内容に関する報告、相談、ディスカッションなどである。教員になってからの学生とのかかわりについては、上記に挙げた実験・実習を担当したことから学科学生全員と面識を持つことができた。また、ほぼ似た内容の学習経験を共有することで理解もし易かった。

2. 生活環境学科への赴任

尚綱へは女子短大から4年制大学への改組・移行する時期に着任した。当初担当した専門科目についてはカリキュラムの中で求められている内容を学生に伝えるといった自身が受けた授業スタイルをとった。しかし年次進行途中での着任であったため、受講している学生が本学でどのような学びを積み上げてきたのかが分からなかった。また他の学科教員が担当している科目についても自身の担当との関係性が見えていなかった。近くなった学生に「〇〇先生の授業でも似たテーマ・素材の話聞いた。」と言われたことをきっかけに、他分野（教員・授業）とのつながりを意識するようになった。着任の翌年に完成年度を迎え、4年の卒研を担当するようになると、学科学生の志向も見えはじめてきた。

その後、カリキュラムの見直しに伴い、私自身の伝えたい内容を積み上げていきやすい科目配置にしてもらった。また1年次に専門基礎科目を開講させてもらい他学科学生にも開放した。授業では、学科の他の専門分野（教員）とのつながる内容を盛り込むようにした。

一方で、資格として「建築士」「衣料管理士」を目指している学生が多くいる中で、どちらにも属さない学生もいて気にかかっていた。生活環境学科では1、2年次に「環境社会検定（eco検）」取得に向けた教育を行っていたが、2、3年時の資格取得後にモチベーションを保ちつつ次のステップを目指す仕掛けが必要と考えた。そこで「環境再生医（初級）」資格の認定校となり、4年進級時に認定申請できるようにした。これは受験生・入学生に対し目標を提示する意味もあった。

3. 環境構想学科へ

2014年4月から環境構想学科に名称変更され、地域環境、都市環境、生活環境の3つのコースを軸に学習を進めることとなった。環境構想学科のカリキュラムは卒業生学生自身にいずれの分野・科目群を中心に学ぶのかという意識をもってもらい、またコースごと実験・実習・演習科目では履修要件を設け、積み上げ学習の効果を狙い、コース担当の教員の下で卒論に取り組むこととした。一方で生活環境学科から続く学際的な環境分野の学びも重要と考え、「東北の〇〇環境」を選択必修としたり、環境構想プロジェクト演習を開講したりした。

ここまでの中で、学生の学びがより良いものとなるように、試行錯誤しながら誘導してきたと感じている。あまりに自由にしてしまうと、何を学んでいるのか見失ってしまいがちになる中で、押しつけお仕着せ感を学生に与えず、引っ張るのではなく後押ししていくようなことをさぐってきたのではないかと思う。

余談になるが生活環境学科4期生、8期生、環境構想学科4期生の3学年の担任となる巡り合わせになった。いずれも各カリキュラムの最終学年にあたり、入学時から卒業に至るまで相談を受け、一緒に寄り添う姿勢が要求されたと感じている。

4. 学部・学科から学群・学類制へ

今春から、新しい仕組みで学ぶ学生たちが入学してきた。特に私に関わる人文社会学群では、

学生自身で学びを組み立て可能とし、将来像を学生自身が模索できるとの特徴を掲げている。これまでの学科制で関わった学生よりも多くの多様なニーズに対応していくことが求められると思われる。少人数教育を大事にしてきた学院の文化を損なわないようにとアドバイザー制が設けられた。担当する学生に適切なアドバイスをするためには、提供している学びを教員が理解する必要が生じる。私が着任した時には約10名分の教員の学びのメニューを理解しようとしたが、今後はさらに多岐にわたる専門分野を有する教員相互の理解が必須となるだろう。

大量生産、消費の時代はもう過ぎ去り、型にはまった学生を輩出する時代でもなくなっている。社会で求められる基礎的素養だけは身につけるように引っ張り、学生個々の力が発揮できるよう見守っていくことが大事ではないだろうか。学生を見つめ、彼らから求められていることを理解・把握して学びを提供していくことを大切に考えたい。

我々が対峙しているのは生身の若者たちであり、彼らが成長していく環境を我々は育んでいきたい。

学習者と教育者

講師 岡崎 有里

私が大学において、栄養士や管理栄養士を目指す学生を対象とした授業を担当するようになって、今年でちょうど10年目となる。“10年”という言葉聞いてふと思い出したのは、学生の頃に参加した大好きな作家の講演会であった。その作家は、「作家でも何でも、何かを始めたら10年は続けることが大切である」と、当時の私たち学生に対して熱心に語っていた。

さて、その“10年目”がとうとう私にもやってきた。

私は大学院を修了した後、助手として働いた。この期間は、自分が主となり授業を担当する立場ではなかったため、授業担当教員の補佐に従事していた。今思うと私は、この助手であった期間に、『学びの最適化のために』重要な要素を学習する機会を得ていたと振り返る。

助手として勤めていた頃は、教室内における「学習者」と「教育者」のやり取りを自分が「観察者」として学べる機会が多々あった。そこで学んだことは、教育者は学習者の特性をよく知り、理解するように努めなければならないということであった。

授業は毎回、学習テーマがあるため、ほとんどの場合、まず教育者から言葉が投げかけられ、授業がスタートする。その投げかけられた言葉を学習者がキャッチすることが重要であり、キャッチできなければ、授業は成り立っていかない。

よく講義は教育者から学習者へ向けた一方向的な授業となる可能性が高いといわれているが、この言葉のキャッチボールを教育者自身が意識しようとせず、講義の内容だけを一方的にずらざらと講話するのは、学習者にとって望ましい授業であるとは言い難い。教育者と学習者の言葉のキャッチボールが成立し、双方間で学びが広がっていくのが授業の理想的な形であると考えられる。よって単純に考えてみると、授業は教育者と学習者が、あるテーマに基づいた会話を行う場であるともいえるため、教育者は学習者に歩み寄り、会話がしやすいような環境づくりに努めることが重要となる。